〔個人研究〕

ブッダとガンディーにおける非暴力の相違

南部千代里

1　はじめに

宗教学者山折哲雄（一九三一―）は、著書『聖と俗のインド』（有学書林）において「ガンディーこそは、仏教を創始した釈迦の、真の継承者だ」[1]と言明している。この発言を疑問視するのは筆者だけではない[2]と思われる。そのため本研究は、モーハンダース・カラムチャーンド・ガンディー（Mohandas Karamchand Gandhi、一八六九―一九四八、弁護士、政治家。以後ガンディーに統一）の思想を理解するため、まず彼の宗教であるヒンドゥー教とはどのような宗教であるのかを明示し、つぎにインド固有の不可触民問題に関してガンディーと正面から対立した、「インド憲法の父」と呼ばれているアンベードカル[3]を取上げて、ガンディーの非暴力と断食の真意を、加えてなぜ暗殺されたのかを問い、そして不可触民をハリジャンと呼んだ彼の意図はどこにあったのかを検証しながら、仏教の視点から、山折の発言の真相について考察する。

ことわりとして、インド共和国憲法において不可触民制は廃止され、今日彼らは憲法第三四一条により「指定カースト（Scheduled Castes）」と呼ばれている。しかし、ヒンドゥー教徒以外の

者はその範疇に入らないため、本研究では混乱を避けるために不可触民を用いる。

2　ヒンドゥー教―起源とカースト社会の形成―

ガンディーを理解するにおいて、彼自身が「わたしは揺るぎないヒンドゥー教徒である」[4]と表明していることから、ヒンドゥー教への理解は不可欠である。しかし、それには教祖は存在しない、そのため成立年代も特定できない。また、キリスト教の『聖書』やイスラム教の『コーラン』のような全信徒が共有する聖典もない。そのため、一般の日本人がこれを理解するには困難を要する。よって本章においては、簡素に、ヒンドゥー教の起源とインド特有のカーストはどのような構造であるのか検証してみたい。

(1)ヒンドゥー教の起源

古代アーリア人のインド進出は、一般には紀元前一五世紀頃と推定されている。しかし、なぜ彼らが現在のアフガニスタン地域からヒンドゥー（インダス河上流地域）に到着したのか、研究者によるさまざまな説はあるが、未だ「分からない」[5]。ただ一八五八年以来インドを統治していたイギリス政府による大規模遺跡発掘によって、アーリア人侵入以前にナーガ族やドラヴィダ族、ムンダ族などの先住民が高度な市民社会を形成（ハラッパー文明）していたことが、一九二一年に明らかとなった程度[6]である。

古代アーリア人は、ヒンドゥーに定住するまで遊牧民族であった[7]。そのため、彼らは自然を畏れ敬っていた。しかし、ポルトガル人から歴史の観念がインドに導入される紀元後一六世紀まで歴史に相当する言葉が存在しなかったことから、彼らは歴史書を遺していない[8]。よって、その信仰形態を知る手掛かりは、唯一、最古の『リグ・ヴェーダ』（紀元前一二世紀頃讃歌成立）[9]だけである。そこには、天空や太陽、風、雨、雷な

どの自然現象が神格化された三三とも三三三九とも言われる神々が登場する。[10] これらから、古代アーリア人の信仰形態が汎神論的多神教であったことが判明する。

宗教的知識であるヴェーダは、文字化される紀元後8世紀頃まで口承されてきた。[11] そのため神々に捧げる祭儀は、神々と人間との媒介者であるバラモン（祭司）が執り行っていた。[12] よってヴェーダに基づくアーリア人の信仰を、一般にバラモン教と呼ぶ。

バラモン教は、先住民の信仰をヴェーダ信仰に吸収しながら、次第にインド全土に伝播していった。深くインドの土壌に根ざしたこの信仰を、一般にヒンドゥー教と呼ぶ。したがってヒンドゥー教とは、古代アーリア人の自然崇拝を種子として、多神のバラモン教を母胎とした、インド固有の民族宗教[13]であることが理解されるのである。

(2)カースト制と不可触民の誕生

肌の色が白いアーリア人は、肌の色が浅黒い先住民をダスュ（魔族）と呼んで厭悪した。[14] すでに鉄製の武器を持つアーリア人は、無防備の先住民を殺害し、降参した者たちは奴隷とした。これが、後のインド社会の構造の根幹をなすカースト制[15]の祖形であるヴァルナ（肌色）思想の由来である。[16]

肌色の違いがそのまま支配・被支配を区別する決め手となった時、色を意味したヴァルナが身分や階級を表す語となった。そのためアーリア人は、[17] 自らの純潔を守るために浄・不浄の観念を導入し、先住民をパンチャマ、すなわちヴァルナを持たない不浄の者と呼んで、自分たちの生活圏から追放した。[18]

アーリア人社会においても、アーリア人の血が濃い者から順に下へと、階級制度が作られた。それの第一位がバラモン（祭司、ヴェーダ教授）、第二位がクシャトリア（藩王、貴族）、第三位がヴァ

イシャ（商業に従事）、第四位が上位三位に仕えるシュードラ（農・工・牧畜民、富の蓄積禁止[19]）である。

そしてアーリア人は、シュードラの下に、人為的にパンチャマをおき、たとえば、マハールと呼ばれるそれには罪人の刑を執行させ、その死体処理や屠畜、バンギーと呼ばれる者たちには人糞処理に従事させ、世襲制を採らせた[20]。

このようにして、およそ三〇〇〇年間にも渡り、見るも触るもその影を踏んだだけでも穢れると言われるパンチャマ、すなわち不可触民[21]（untouchable）が、今日まで存在し続けることになったのである。

(3)人生観

ヒンドゥー教の特徴の一つに、紀元前八世紀頃に成立したと言われているサンサーラ（輪廻転生）思想[22]がある。この思想は、前世における善・悪行の結果として、現世の幸・不幸に繋がっている、宿命論的人生観である。たとえば、バラモンの胎に生まれた者は前世において善人、パンチャマの胎に生まれた者は悪人であったからである。よって、人間は前世において自分が犯した罪を償うためにこの世に転生したのだと、ヒンドゥー教は人々に自覚させてきたのである。

このような因果応報論を人々が受容してきたのは、紀元後二世紀頃に編纂された[23]人類の祖マヌが勅宣した『マヌ法典』に、宇宙創造神プルシャ[24]はその「口、腕、腿、足より、バラモン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラを造れり[25]」「バラモンの殺害者は、犬、豚、驢馬、駱駝、山羊、鹿、鳥の胎に入る[26]」「ヴェーダを知らざる者には水すら與ふべからず[27]」とあるからである。

ヒンドゥー教における究極の救済は、「生天[28]」である。しかし、叶わずこの世に再生する時には、家畜以下の扱いにも耐えて罪を償うパンチャマだけには転生したくないという悲願から、人々は長期に渡り黙し続けてきたのである。

3　ガンディー―人と思想―

イギリス統治下からインド独立のために「非暴力」の精神を貫いた人としてガンディーが紹介されるのは、彼の言動が断食など宗教的装いを凝らしていたことが多かったからかと思われる。しかし、ガンディー研究者坂本徳松は、彼の非暴力や断食は「宗教上の目的で行なわれたのではない」[29]と断言している。よって本章では、それは何を目的として行なわれたのかを、アンベードカルとの対立や暗殺事件、彼のハリジャン発言の真意を問うことによって考察してみたい。

(1) M・K・ガンディー

一八六九年ガンディーは、元々は香辛料の商いをしていたヴァイシャの家に生まれ、母語はグジャラート語[30]である。一三歳で同じカーストの同歳の娘と結婚、一八歳の時にサマルダス大学に入学したが「あまりにもむずかしく」[31]一学期で中退、翌年イギリスのインナーテンプル法学院に留学する。

一八九一年弁護士資格を取得し帰国。しかし資格を生かす仕事が見つからず、妻の実家の厄介になる。二年後、南アフリカ在住のインド人ダーダ・アブドゥラーが開業している法律事務所が、現地のインド人移民たちが起した事故処理のため、英語とグジャラート語が話せる（移民の大半が「文盲」[32]）使用人を募集していた。このような経緯から、ガンディーは南アフリカ連邦へ渡る[33]。そこにおいて、イギリス留学において経験しなかった、インド人に対する差別を経験する。当時の南アフリカは、イギリスとオランダからなる連邦政府が権力を握り、「苦力（クーリー）」と呼ばれている「有色人」[34]移民に対して白人と差別する法的規制をかけていたことから、ガンディーは同郷のクーリーが白人と同等の権利を享受で

きるようにと、政府を相手に闘う。但し、彼はアパルトヘイトには「まったく関心を示さなかった」、関心は「インド人の権利のみ」[35]であった、と坂本徳松は報告している。これは注目に値する。

ガンディーは、この時代に国家の不正に対して個人のとるべき道を示したトルストイの著書『神の国は汝らの内にあり』（冬樹社）[36]や、またメキシコ戦争（一八四六―一八四八）と奴隷制度に反対して六年間人頭税の支払いを拒否したため逮捕され、一晩投獄された体験から国家の方針に抗議した、アメリカの超絶主義（Transcendentalism）者H・D・ソロー（一八一七―一八六二）の著書『市民の反抗』（岩波書店）[37]に大いに共鳴し、それらから彼は「非暴力の原則に則した政治活動の形態を思いついた」[38]と言われている。

一九一四年帰国。以後ガンディーは、祖国独立のため、南アフリカで実践したと同じ、対イギリス非協力・不服従運動であるサティヤグラハ[39]を開始する。

(2)死に至るまでの断食

一九二〇年代に入ると、イギリスの植民地インドでは統治法改正問題をめぐって民族運動が急激な高まりをみせていた。ガンディーは、国民会議派を率いて、裕福層に対してはイギリス製品の不買や衣類の焼却、一般大衆にはイギリス政府により高い税金が課せられていた塩をインド人が自由に製造販売することができるようにと塩税廃止や、固定資産税および軍事費の削減を要求し、また全インド人に課せられた武器携帯禁止に反対するなどの、サティヤグラハを展開した。これらに対してイギリスは、一九三一年懐柔策として各界を代表するインド人をロンドンに集め、円卓会議を開催した。そこにおいて、ガンディーは、不可触民の代表として参席していたアンベードカルと対立する。アンベードカルが、不可触民の地位向上のためには議会に彼らの席が必要であると訴えたから

である。しかしガンディーは、それはカースト社会を解体させる策案であると猛反対する。[40]

一九三二年九月ガンディーは、イギリス政府が円卓会議の裁定に基づいてヒンドゥー教徒・イスラム教徒・不可触民の三者分離選挙を法制定しようとしたことに対する反対表明として「死に至るまでの断食」を始める。[41] 彼は、アンベードカルが分離選挙案を放棄しない限り断食を続けると宣言した。これを英雄視する研究者もいるが、視点を変えるならば、彼はアンベードカルを脅迫したのである。だからガンディーの断食は、人命か、裁定か、二者択一を迫ることで敵対者の良心を揺さぶる、非武装的暴力行為であると言えよう。

結果として、アンベードカルは、第一にガンディーが高齢であったこと、第二にもしガンディーが死んだならば彼の支持者たちから不可触民に対し暴力的逆襲が起こる可能性は高い、この二点を考慮し、提案を棄却した。ガンディーは大変満足し、断食は5日で終った。もしアンベードカルが譲歩しなければ、彼にガンディーの死の責任を負わせることができる状況をガンディーはつくった。ガンディーの戦略の勝利であった。だからノーベル文学賞を受賞した詩人ラビーンドラナート・タゴール（一八六一―一九四一）は「ガンジーは非暴力を説きながら、暴力の種を撒いた」[42]と批難したのである。

蛇足ではあるが、ガンディーが断食中に飲んでいた水は、実は、ライム・ジュース[43]であった。一九四三年、ベンガル州知事ラジャゴパラチャリが彼に直接これを問うたところ認めたので、その理由を訊ねると「自分の弱さからだ」[44]と答えたという。マハトマ（偉大な魂）[45]とまで呼ばれているガンディーであるから完璧な断食と、信じた者が窮地に立たされたのである。だからアンベードカルは、ガンディーの断食は「英雄的どころか不可触民の向上を阻む「きたないやり口」[46]」だから「気をつけろ」[47]と弟子たちに忠告したという。

(3) 暗殺

一九四八年一月三〇日ガンディーを暗殺した主犯、バラモン階級のナスラム・ゴッセ（一九一〇年生、一九四九年アンバラ刑務所にて絞首刑）は、事件前に、ガンディーがいなくなれば「インド政府は遠慮なく自国民のための政策を選べる」[48]（傍線：筆者挿入）と語ったという。

なぜなら、すでにインドからパキスタンは分離独立（一九四七年）していたにも拘らず、ガンディーが「インド政府を全部ムスリム（イスラム教徒：筆者挿入）に渡せ」「国の基金のパキスタンの分をすべて渡すべきである」[49]と主張、加えてデリー市内の破壊されたイスラム教徒の家やモスクの修理[50]をもインド政府に要求した、しかし却下されたため、またもや彼の意に政府を従わせるために、一月一三日から断食に入った[51]からである。

結果として、今回もインド政府はガンディーの要求を呑み、五億五千万ルピー（当時インド政府の保有現金は二二億ルピー）[52]もの大金を、交戦中のパキスタン政府に渡した[53]。

では、なぜゴッセたちはガンディーを殺したのであろうか。研究者によるさまざまな説はあるが、M・マルゴンカールは、紀元後一六世紀ムガル帝国がほぼインド全土を征服して以来の宿敵であるイスラム教徒のために、断食を武器として、インド政府に巨額の金を捻出させたガンディーは、バラモン階級のゴッセたち国粋主義者の「彼らの目には、国家的裏切り」[54]であったからであると、暗殺者たちから直接聞いた証言[55]を基に述べている。

(4) ハリジャン

不可触民制は、最下級の労働を無報酬で彼らに強制するものである。そのため、死んだ動物の肉やゴミの中から、あるいはカースト上位者から「犬や鳥や昆虫に与える場合と同様に、食

物を地面に撒いた[56]」、それらを拾い、泥水を飲みながら[57]、人糞にまみれて彼らは生き延びてきた。

これまで日本ではあまり語られてこなかったが、一九三七年アンベードカルは、不可触民は無報酬ではなく彼らの仕事の質と量に見合った報酬（賃金）が支払われるべきである、という案を議会に提出[58]している。これに対してガンディーは、この制度、つまり金脈を、彼の支援者[59]から手放させるようなことはさせなかった。その換わり、不可触民をヴァルナ最下位のシュードラに同化させようとした。当然ながら、シュードラは不可触民の受入れを拒んだ[60]。ガンディーは、インド人口の約一五％を占める不可触民が、すでに改宗宣言をしていた[61]アンベードカルと共にヒンドゥー教を棄てたならば、最下級の労働を、それも無報酬でやる者がいなくなることを恐れた[62]。

そこでガンディーは、ヒンドゥー教徒不可触民に限定して「ハリジャン（harijan：ヒンディー語）」という名を与えた[63]。つまり、お前たち不可触民は太陽神ハリの子なのだから、アンベードカルに唆されても決して他宗教に改宗するなど考えるのではないぞ、という意味である。

したがって、ガンディーのハリジャン発言は、不可触民制の解体、すなわち救済ではなく、ヒンドゥー教の残酷な面を耳触りよく覆った不可触民制の永久化を意図したものであったのである。

4　ブッダとガンディーにおける「非暴力」の相違

山折哲雄は、先述の『聖と俗のインド』において、ガンディーこそがブッダの「真の継承者」であることへの明証の一つとして、以下のように述べている。

ブッダもガンディーも、「非暴力」（ノン・ヴァイオレンス）という問題をその実践的な

場面で徹底的に考え抜き、ついにそれを高い思想的な水準にまで鍛えあげたということにつきる。彼らは「非暴力」という思想を共有することによって、二千五百年の時間の壁を飛び越えて肩をならべているといえるのではないだろうか。[64]

仏教の開祖ゴーダマ・ブッダ（覚者）とガンディーは、共に「非暴力」を説いたという点から、二者は同じ思想の持ち主として、時間差はあるが、同格であると言うのである。

よって本章においては、二者の「非暴力」が同義であるのか検証してみたい。

(1)-1. ブッダが説いた「非暴力」

仏教が、どのような形の暴力も批難していることがよく知られているのは、開祖ゴーダマ・ブッダが暴力を徹頭徹尾否定したからである。最初期仏教の「金言的説法の詩集」[65]と称される仏典『ダンマパダ』（中村元訳、岩波書店）において、ブッダが暴力をどのように考えていたのか理解される。[66]

すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身をひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。

すべての者は暴力におびえる。すべての（生きもの）にとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。

生きとし生ける者は幸せをもとめている。もしも暴力によって生きものを害するならば、その人は自分の幸せをもとめていても、死後には幸せが得られない。

生きとし生ける者は幸せをもとめている。もしも暴力によって生きものを害しないならば、その人は自分の幸せをもとめているが、死後には幸せが得られる。

荒々しいことばを言うな。言われた人々は汝に言い返すであろう。怒りを含んだこ

とばは苦痛である。報復が汝の身に至るであろう。[67]

ブッダは、物理的な暴力だけでなく、「荒々しい」「怒りを含んだことば」も暴力であると言う。これらには、人を二度と立ち上がれなくさせる、自ら死を選ばせるほどの「力」がある。現代において言うところの、ドメスティックバイオレンスやモラルハラスメントである。そのため、ことばの「暴力におびえる」、その「苦痛」に耐えきれなくなった時、「言われた人々は汝に言い返す」、すなわち「報復」が始まるのである。そこから、さまざまな争いが起こってくる。だからブッダは、暴力の連鎖をくい止めるためには、我が身に置き換えて、どのような形であったとしても相手を「殺してはならぬ」、たとえどのような理由があったとしても相手にも「殺さしめてはならぬ」と説いたのである。

このように、人間同士の怨み・憎しみの感情を人間から永久に消し去るための、「心」の在り方（『ダンマパダ』[68]）を説き、すべての生命に害を加えない、それらを「愛せ」というのが、ブッダの「非暴力（ahiṃsā は、語幹である hiṃsā（有害性、そこから暴力）に、否定辞の a がついたものである）」である。

(1) - 2. 普遍的救済宗教としての仏教

不可触民は、ヒンドゥー教徒である限り、「生れ」は宿命として盲従するしか生きる道はない。しかし、彼らには寺院の門を潜ることすらも許されていない。もしヴェーダを盗み聞きでもするならば、バラモンは彼らの「耳に溶けた鉛を流し込む」[69]。そのため、彼らは「無口な家畜」[70]として人生を終える。では、カースト社会における人々の役割を定めたスヴァダルマである『マヌ法典』の権威に押し潰された不可触民に救済はあるのだろうか。

不可触民において救済とは、二度とこの世に生れないことである。そうであるならば、殺生

のマハールにおいては何度死んでも救済はない。もし彼らが救済されるとしたならば、カーストを否定したブッダの教えしかない。[71] なぜならブッダは、「生れを問うことなかれ、行ないを問え。火は実にあらゆる薪から生ずる。賤しい家に生まれた人でも、聖者として道心堅固であり、恥じを知って慎しむならば、高貴の人となる」（『スッタニパータ』四六二詩句）[72]、そのため「清らかな行ないを究極の理想とせよ」（『スッタニパータ』七一七詩句）[73] と、人間の価値を「行ない」におき、「人びとの生れや生活振りなどいささかも気にすることなく」[74]、下層階級全体が人間としての尊厳をもって生きる道を説いたからである。

「仏教は人間と自然との共生を説くことに至る」[75] と石上善應が述べているように、それはすべての人が自然と共に平安に暮らせる平等な世界を志向する。その普遍性ゆえに、仏教は人種・民族・言語・文化・国境の壁を超えた世界宗教となったのである。先述のタゴールは、仏教について以下のように詩っている。

仏陀が、生きとし生けるものへの慈悲の真理を修道の果実として得て、説いたときに、インドは花のような若々しさのうちに眼を醒ましたのである。その力は、学問に、芸術にまた富にまで拡まり、大洋を渡り、砂漠を超えて行った。〔中略〕。『愛』だけが真理である。愛が自由をあたえるとき、愛は真理をわれわれの中心に入れるのである。[76]

(2)ガンディーが説いた「非暴力」

では、ガンディーが説いた「非暴力」とは何であったのであろうか。たとえば、ドイツ出身のユダヤ人であり、ナチズムが台頭したためアメリカに亡命した哲学者ハナ・アーレント（一九〇六―一九七五）は、著書『暴力について―共和国の危機』（みすず書房）において以下のように述べている。

暴力と権力とが正面衝突する場合、結果

はほぼ明らかである。もしガンディーの途方もなく強力（パワーフル）で上首尾に運んだ非暴力的抵抗の戦略が、イギリスでなくて、別の敵――スターリンのロシア、ヒトラーのドイツ、さらには戦前の日本――にたいするものであったとすれば、結果は植民地からの脱却ではなく、大虐殺であり屈服であったことだろう。[77]

権力に逆らうと直ちに粛清される時代において、ガンディーの「非暴力的抵抗の戦略」がインドで成功したのは、相手がイギリスだったからだと言うのである。つまり、彼のそれは普遍的ではないという意味である。相手次第で、成功・不成功に別れるからである。相手によっては、独立どころか、インド人大虐殺であったかも知れないと、彼女はガンディーの「非暴力」の弱点を指摘している。要するに、ガンディーの「非暴力」は、「いつでも、どこでも」通用する戦略ではなく、インドのみに適応したナショナリズムであったのである。

ガンディーの「非暴力」は、3―(1)にて述べたように、H・D・ソローの思想を足懸りとして、南アフリカでは同郷クーリーが被っていた差別を白人と同じ待遇に改善するため、祖国では主権をイギリス人からインド人に奪還させるための闘争で、ガンディーの言葉では「救済の道」[78]であった。ただソローと異なる点は、ガンディーは政治に断食という宗教的装いを凝らして非武装抵抗運動を展開したことにある。特に「死に至るまでの断食」は、政府の考えに近い立場にあったアンベードカル（インド独立直後、ネルー首相は彼を法務大臣に迎えた）[79]を屈服させるために、ガンディーの生死に関して彼に責任を負わせたことは、3―(2)にて述べた通り、政治的に脅迫した非武装的暴力行為であった。そのため、「非暴力」は存在が想定される「暴力」に対してのみに考えられることから、ガンディーのそれは彼に敵対する者への「憎悪から生まれた」[80]と解

釈する研究者もいる。[81]

このように、ガンディーの「非暴力」とは、彼自身が「武器を持たずに、すなわち軍事用語をもって言うなら、非暴力の武器を持って」[82]、自分たちインド民族の「権利を獲得する方法である」[83]、もし「卑怯か暴力かのどちらか一方を選ぶ以外に道がないならば、わたしは暴力を勧めるだろう」[84]と語ったように、トルストイが「悪をもって悪に抗するな」[85]と言った無抵抗主義では決してない。あくまでも、彼の「非暴力」は、権力把持のための方策、ないし手段であったのである。

(3)ブッダとガンディーの「非暴力」は同義か

先の山折は、『比較文明と宗教』と題した論文において、「初めてブッダによる不殺生の救済が説かれ、それが現代に蘇って、ガンディーの非暴力を生み出した」[86]と言明している。

つまり、ブッダが説いた不殺生の救済説が因となって、果としてガンディーの「非暴力」が生れたと言うのである。確かに、二者は「非暴力」を説いているが、果たしてそれらは同義なのであろうか。

たとえば、生前のガンディーを知るロマン・ロランは、インドの「人々はほとんど無限の政治的権力を彼（ガンディー：筆者挿入）に委ねる。国民は彼を聖者だと信じている。シュリー・クリシュナとしてガンジーの肖像が描かれる」[87]と述べている。古代インドの神話的英雄である聖クリシュナは、ヒンドゥー教の三大高神の一つヴィシュヌの第八番目の化身である。ガンディーはその化身として人々から崇拝され、彼自身も自分は「心底からヒンドゥー教徒である」[88]と断言している。そのような彼が、ヴィシュヌ神の第九番目の化身[89]として、神を立てない異端者[90]としての使命を担ってヒンドゥー教史に登場するブッダの救済説から、「非暴力を生み出した」とは考えられない。なぜなら、ガンディーの「非暴力」の因は、つまり動機は、繰り返しになるが、

「市民は納税拒否といった平和的な手段に訴えて政府に抵抗する権利を有する」[91]と述べたH・D・ソローの、ガンディーが「肌身離さずもち歩いていた」[92]、『市民の反抗』であったからである。したがって、4―(1)―2において述べたブッダの救済説と、ガンディーの「非暴力」との間には、現時点においては、同義性はない、と思われる。

以上から、生きとし生けるものへの普遍的な愛と慈しみという宗教概念の上に構築されたブッダの「非暴力」と、同郷クーリーの人権と生活擁護と祖国インド独立のための、反政府活動の一形態である非武装的抵抗という政治概念の上に構築されたガンディーの「非暴力」とは、言葉としては同じであるが、「質」がまったく異なることが顕著となった。すなわち、二者の「非暴力」は同義ではないことが明瞭となったのである。

したがって、本研究は、山折哲雄は「ガンディーこそ」は「釈迦の、真の継承者」であると特定したが、それは彼の独断的発想である、と言わざるを得ないのである。

5　おわりに

非暴力が、ガンディー思想の核であることは改めて述べるまでもないだろう。問題は、「日本を代表する知の重鎮」[93]と言われているほどの、社会的に著名な宗教学者である山折哲雄が「ガンディーこそは、仏教を創始した釈迦の、真の継承者だ」と公言したことに対して、一般の人々がこの発言を、精査することなく、真実として受容してしまう可能性があることにある。つまり、ガンディーを第二の釈迦（山折はガンディーを釈迦の「応身」[94]と述べている）として人々が受諾してしまうかも知れないという深刻な問題を孕んでいるのである。その後山折は、二〇一三年『母なるガンディー』（潮出版社）を出版、二〇二一年には同題名と内容で再刊（地人館 E-books）し

ている。彼は、そこにおいても「私はガンディーこそ、現代における釈迦の正統的な後継者ではないかと考えています[95]」「ガンディーの中に釈迦の精神は見事に継承された[96]」「ガンディーこそ釈迦の後継者である[97]」と明記している。これらから、一九九二年以来山折の主張に、現時点においては、変化は見られない、と思われる。

釈迦、すなわちゴーダマ・ブッダは、マヌのように人間の価値を「生れ」ではなく、「心」の在り方においた。そのため、彼は、バラモン教の基盤であるカーストを否定した[98]。そして、人々が幸せに暮らせる平和な世界を齎すために、人間同士の怨み・憎しみを完全に払拭して、互いに無償に終始しようと努める、すべての生命を慈しむ非暴力を説いた。これに対し、ガンディーは、カーストの解体については「どこにも主張していない[99]」。彼は敬虔なヒンドゥー教としてマヌに従い、人間の「生れ」は神の創造の意による[100]、カーストは差別ではなく社会的「調和[101]」と確信している。そのため彼の社会正義は、インド人を苦しめているイギリスに向けられ、それによる支配の終焉を齎す方策・手段である非暴力を説いた。したがって、ブッダの「非暴力」とガンディーの「非暴力」とは、言語としては同じであるが、その本意は著しく「質」を異にするのである。

しかし、先の山折は、繰り返しになるが、ブッダとガンディーは「「非暴力」という思想を共有することによって、二千五百年の時間の壁を飛び越えて肩をならべているといえる」と、同じ思想の持ち主として二者を同格に捉えている。そこで本研究は、第4章において、「非暴力」を軸として、ブッダとガンディーにおけるそれについて比較を試みた。その結果、二者間における「非暴力」は、根本的に異なることを明示した。なぜなら、ガンディーは、H・D・ソローの『市民の反抗』に大いに印象づけられ、非暴力的な社会政治的行動方法を考案し、南アフリカにお

ける同郷クーリーの人権擁護や母国におけるインド独立を実現するための対イギリス非武装抵抗運動を実践した経緯から理解されるように、ソローの精神をくむ者であって、宗教的動機からブッダの精神をくむ者とは、出発点が異なることが明らかとなったからである。

ガンディーは、植民地として苦しむインドを解放するために働いたという意味においては尊敬される。同時に、彼の「非暴力」はインドにおいては効力があったが、これが「いつでも・どこでも」通用する普遍的救済思想であるかは、アーレントが明察したように問題である。したがって、私たち仏教徒がとるべき態度は、山折の主張に対して、ブッダとガンディーの「非暴力」は、「異質」の否定であることから、ガンディーこそがブッダの「真の継承者」であると特定できないことを、正しく理解することが肝要となるのである。

今日、世界は戦争の悲惨さから平和の意義が改めて問われる現状下にある。同じ意味で、誰をも傷つけないというだけに留まらず、すべての戦争や暴力、生命あるものの破壊をくい止め、平和を推し進めるブッダの「アヒンサーの福音」[102]、つまり人間同士の怨み・憎しみの感情を人間から永久に消し去ってくれる「非暴力」は、大いに問われなければならないのではないだろうか。自民族・自国民だけの平和を主張するのではなく、地上に生まれたすべての人が自然と共に平安に暮らせる世界を齎す、そのための慈悲による共生の実践こそが、仏教的パースペクティブであるからである。[103]

註

（1）山折哲雄『聖と俗のインド』有学書林、一九九二、初版、三八頁。山折は、一九九八年『聖と俗のインド―現代によみがえるガンディー―』と題して、内容も有学書林とまったく同じものを第三文明社から出版している。本研究は、混乱を避けるため、有学書林、初版を使用する。

（2）インド文化研究者山際素男は、山折は「ガンディーこそ現代の釈迦である」などといっているが、開いた口がふさがらない」と述べている。山際素男「アンベードカル

と現代インドの激動」、ダナンジャイ・キール、山際素男訳『アンベードカルの生涯』三一書房、一九九五、三〇七頁。

(3) ビームラーオ・ラームジー・アンベードカル（一八九一―一九五六）は、不可触民の家に生まれた。当時の不可触民は教育を受けることはできなかったが、彼は苦学しながら藩王より奨学金が支給され、コロンビア大学にて政治学博士、ロンドン大学で経済学博士号を取得、グリーズイン法曹学院で法廷弁護士の資格を取得する。帰国したアンベードカルは、不可触民差別撤廃運動の指導者となり、不可触民にも公共の井戸や貯水池の使用を認めさせる運動を開始する。しかし彼の運動は、上位カーストによって悉く阻止される。一九二六年アンベードカルは、ボンベイ州議会議員となる。以後、政治家として不可触民差別を撤廃させようと努力したが、ガンディーと正面衝突し、敗北する（この体験から、彼は後にヒンドゥー教から仏教に改宗している）。一九四八年インドとパキスタンの分離独立に猛反対していたガンディーが暗殺され、一方アンベードカルはガンディーの愛弟子であったネルー首相に法務大臣として迎えられる。一九四九年、インド憲法起草委員会の委員長として共和国憲法をまとめ上げる。山崎元一『インド社会と新仏教』刀水書房、一九七九、二三―二四八頁。

(4) ガンディー、森本達雄訳『非暴力の精神と対話』第三文明社、二〇〇一、一九二頁。

(5) 辻直四郎『インド文明の曙』岩波書店、一九六七、一〇頁。

(6) 同上書、一八六頁。

(7) 馬場紀寿『初期仏教』岩波書店、二〇一八、三頁。

(8) 森本達雄『ヒンドゥー教―インドの聖と俗―』中央公論新社、二〇〇三、六六頁。

(9) アーリア人の宗教・神話・生活態度を伝える根本資料。辻直四郎、前掲書、三五頁。

(10) 同上書、四四―九〇頁。

(11) 森本達雄、前掲書、八三頁。

(12) 馬場紀寿、前掲書、四頁。

(13) 宗教の伝播が部族を超えて拡がっても、一国家の範囲にとどまるものが民族宗教である。増永靈鳳『宗教概論』駿河台出版社、一九六九、五九頁。

(14) 佐々木教悟・井ノ口泰淳・高崎直道・塚本啓祥『仏教史概説インド篇』平楽寺書店、一九六六、五〇頁。

(15) 語源はポルトガル語のカースタ（casta）で、それは出生、人種、種族を意味する。坂本徳松、前掲書、一八八頁。

(16) 佐々木教悟・井ノ口泰淳・高崎直道・塚本啓祥、前掲書、一四頁。

(17) アーリアは「高貴な者」を意味する。馬場紀寿、前掲書、二〇七頁。

(18) 田辺繁子訳『マヌの法典』岩波書店、一九八一、第一六刷、三一六頁。

(19) 富の蓄積によって傲慢になり、上位三位のヴァルナに奉仕しなくなる故である。同上書、三一六頁。

(20) 同上書、三一五―三一六頁。

(21) 一九五〇年以降、法的には、不可触民は存在しないことになっているが、二一世紀に入っても、夜こっそり直接井戸水を汲んだ不可触民女性たちが村人に見つかり、頭を坊主に剃られ、素っ裸にされて、首にロープをかけられ、人々の面前で「引き回されたという記事を、今でもしばしば目にすることがある」と、インド情勢に精通した山際素男は報告している。山際素男『不可触民と現代インド』光文社、二〇〇三、四六頁。

(22) この世の生を、永遠に輪廻転生する霊魂の一時的な通過期間とみる考え方である。佐々木教悟・井ノ口泰淳・高崎直道・塚本啓祥、前掲書、一一頁。

(23) 辻直四郎「あとがき」『マヌの法典』、前掲書、三七八頁。

(24) ヒンドゥー教の宇宙創造神話『リグ・ヴェーダ』「原人讃歌」（一〇・九〇）、詳細は森本達雄、前掲書、九八―一〇〇頁参照。

(25) 『マヌの法典』、前掲書、三〇頁。

(26) 同上書、三六八頁。

(27) 同上書、一三五頁。

(28) 馬場紀寿、前掲書、八頁。

(29) 坂本徳松、前掲書、二四頁。

(30) インド共和国憲法では一八の言語が正式に認められている。公用語と定められているのがヒンディー語で、話者人口の最も少ないのがサンスクリット語である。そのため、紙幣には、たとえば五〇〇ルピー紙幣には一四の文字で「五〇〇ルピー」と記されている。山崎元一『世界の歴史3　古代インドの文明と社会』中央公論社、一九九七、二二頁。

(31) 坂本徳松、前掲書、二三四頁。

(32) E・H・エリクソン、星野美賀子訳『ガンディーの真理』みすず書房、一九七三、二八一頁。

(33) 同上書、二二〇頁。

(34) 当時の南アフリカでは、全「有色」人をひとまとめにしてクーリー、あるいはサーミーと呼んでいた。同上書、二二二頁。

(35) 坂本徳松、前掲書、二二〇頁。

(36) レフ・トルストイ、北御門二郎訳『神の国は汝らの衷にあり』冬樹社、一九七三。この本の題名は『新約聖書』「ルカによる福音書」第一七章二一節からとられている。この著書にてトルストイは、特に「山上の垂訓」のように、キリストが説いたのは平和であり、暴力を終わらせようとしている、と述べている。トルストイは、戦争を行なうすべての国家、政府はキリストの教えを侮辱していると考え、国家主義者とロシア正教会の偽善に対する対抗策として「非暴力主義」を提唱したのである。

(37) 人頭税支払拒否は、「議事堂の入り口で、男や女や子供たちを家畜のように売買する国家」の方針、つまり奴隷制度に抗議するためであった。H・D・ソロー、飯田実訳『森の生活　上』岩波書店、一九九五、三〇五頁。

(38) ロベール・ドリエージュ、今枝由郎訳『ガンジーの実像』白水社、二〇〇八、第二刷、四一頁。

(39) サンスクリット語でサティヤは真理、グラハは把持を意味。坂本徳松、前掲書、三九頁。
(40) B・R・アンベードカル、山際素雄訳『ブッダとそのダンマ』光文社、二〇〇四、三九六頁。
(41) 坂本徳松、前掲書、八二頁。
(42) ロベール・ドリエージュ、前掲書、一三六頁。
(43) マノハール・マルゴンカール、山口瑞彦訳『ガンディー暗殺』三省堂、一九八五、二五頁。
(44) 同上書、二五頁。
(45) 「マハ Maha 偉大、アートマ Atma 魂。この語はウパニシャッドに由来し、神を意味し、また智と愛によって神と合一するものを意味する」。ロマン・ロラン、宮本正清訳『マハトマ・ガンジー』みすず書房、一九八三、七頁。
(46) B・R・アンベードカル、山崎元一＋吉村玲子訳『カーストの絶滅』明石書店、一九九四、二六二―二六三頁。
(47) 嵩満也「アンベードカルにおけるカースト絶滅の道とブッダのダンマ」、嵩満也編『変貌と伝統の現代インド』法蔵館、二〇一八、二二頁。
(48) C・ダグラス・ラミス『ガンジーの危険な平和憲法』集英社、二〇〇九、一三二頁。
(49) 同上書、一二七頁。
(50) インドとパキスタン分離独立をめぐり、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒間に激しい対立が起こり、約六〇万人が犠牲となった。インドに残留したイスラム教徒は約四〇〇〇万人。マノハール・マルゴンカール、前掲書、六頁。
(51) 同上書、一三八頁。
(52) 同上書、二一頁。
(53) C・ダグラス・ラミス、前掲書、一二七頁。
(54) マノハール・マルゴンカール、前掲書、一三七頁。
(55) マラティ語が堪能なマルゴンカールは、暗殺計画に連座した六人のうち、二人は絞首刑に処せられたが、残る四人（共犯告発人のバッケと終身刑のカルカレ、ゴパール、マダンラル、彼らはマラティ語しか話せない）から「数多くの新事実」を聞くことができた。一八年間の服役を終えて出所した「ゴパールも、この本が最も真実に近いと言い切った」という。同上書、二七〇頁。
(56) 山崎元一、前掲書、二一七頁。
(57) インドでは、公共の井戸や貯水池から、牛は飲むことができても、不可触民が井戸を触ると水が穢れると、その傍に立つことさえ許されず、また不可触民もヒンドゥー教徒であるが、寺院の門を潜ることさえも禁止されていた。同上書、二三―七四頁。
(58) 同上書、五九頁。
(59) ガンディーは、たとえば、彼と同じカースト・ヴァイシャ出身の富豪G・D・ビルラから莫大な活動資金と住居の提供を受けていた。坂本徳松、前掲書、二二二頁。
(60) 山崎元一、前掲書、七四頁。
(61) ダナンジャイ・キール、前掲書、二八五頁。
(62) 山崎元一、前掲書、一三三頁。

(63) 同上書、七四頁。
(64) 山折哲雄『聖と俗のインド』、前掲書、一二一頁。
(65) 三枝充悳『仏教入門』岩波書店、一九九〇、九五頁。
(66) 和辻哲郎は、内容も「経の確定がかなり古い時代と考えられる」ところから、「ブッダの精神」「ブッダの思想と考えてよかろう」と述べている。和辻哲郎『仏教倫理思想史』岩波書店、一九八五、五頁。
(67) 中村元訳『ブッダの真理のことば　感興のことば』岩波書店、一九九七、第三六刷、二八―二九頁。
(68) 同上書、一〇―一一頁。
(69) 山崎元一、前掲書、七〇頁。
(70) 同上書、五九頁。
(71) B・R・アンベードカル『ブッダとそのダンマ』、前掲書、一九七頁。
(72)『スッタニパータ』中村元訳、岩波書店、一九九八、第三三刷、九五頁。
(73) 同上書、一五五頁。
(74) ワールポラ・ラーフラ、今枝由郎訳『ブッダが説いたこと』岩波書店、二〇一六、二二頁。
(75) 平成七年度科学研究補助金研究成果報告書　石上善應編『仏教の現代的意義に関する基礎的研究』大正大学、一九九六、八頁。
(76) ロマン・ロラン、宮本正清訳『マハトマ・ガンジー』みすず書房、一九八三、五六頁。
(77) ハンナ・アーレント、山田正行訳『暴力について　共和国の危機』みすず書房、二〇〇〇、一四二頁。
(78) ガンディー、森本達雄訳『わが非暴力の闘い』第三文明社、二〇〇一、一五一頁。
(79) 山崎元一、前掲書、七九頁。
(80) ガンディー『わが非暴力の闘い』、前掲書、一〇六頁。
(81) 同上書、一〇六頁。
(82) 同上書、一〇五頁。
(83) 同上書、一四六頁。
(84) 同上書、二四頁。
(85) レフ・トルストイ、中村白葉訳『人はなんで生きるのか』岩波書店、一九八四、第四九刷、一八六頁。
(86) 山折哲雄「比較文明と宗教」、伊東俊太郎編『比較文明を学ぶ人のために』世界思想社、一九九七、一三六頁。
(87) ロマン・ロラン、前掲書、四八頁。
(88) ロベール・ドリエージュ、前掲書、一一四頁。
(89) 西尾秀生『ヒンドゥー教と仏教』ナカニシヤ出版、二〇〇一、九七―一五三頁。
(90) 三枝充悳、前掲書、六頁。
(91) H・D・ソロー、飯田実訳『市民の反抗』岩波書店、二〇一三、第三刷、三六七頁。
(92) 飯田実「解説」、同上書、三六八頁。
(93) NHK〈Eテレ〉再放送二〇一八年二月一〇日付「こころの時代」、https://www.nhk.jp>
(94) 山折は、「仏教が地をはらってしまった末法の時代に、ガンディーが登場してきた。ブッダを生んだ風土に、ブッ

ダが苦しんだのと同質の通苦の体験を背負って、ガンディーがようやく姿をあらわしたのだといってもいい。仏教徒でないガンディーが永遠のブッダの応身として登場してきたのである。ブッダという存在が末法という時代にあらわれる現われ方として、それ以上のあり方があるだろうか」と述べている。山折哲雄『聖と俗のインド』、前掲書、一二頁。

(95) 山折哲雄『母なるガンディー』潮出版社、二〇一三、一一九頁。

(96) 同上書、一一九頁。

(97) 同上書、一二〇頁。

(98) アンベードカルは「ブッダはカースト制度の最強の反対者であり、平等の最も早い最も強固な主唱者であった」と述べている。B・R・アンベードカル『ブッダとそのダンマ』、前掲書、一九七頁。

(99) 坂本徳松、前掲書、一九二頁。

(100) 『マヌの法典』、前掲書、三〇頁。

(101) 坂本徳松、前掲書、一九一頁。

(102) 上坂元一人『大仏さまと愛の顕彰碑―ジャヤワルダナ元スリランカ大統領と日本―』かまくら春秋社、二〇一九、六七頁。

(103) 「慈悲心は迷える人間の内にも存ずる」。中村元『慈悲』講談社、二〇一〇、六〇頁。